

『感情希薄なアンドロイドが変態淫語プログラムによってやがてアヘりまくってしまう音声作品』 台本

・ Chapter 1 「プロローグ ～起動～」

「…ハードウェアに問題なし。OS起動シーケンスに入ります」

…コードの羅列から、私という意識が表層へと浮かび上がる。
私は、セザキ工業製の汎用アンドロイド。型式ARX-010、シリアルナンバー00024。
人間に奉仕するためにつくられた機械だ。

…OSの各モジュールがスタンバイ。膨大なデータが流れこんでくる。
外部情報を参照。…男性一名。登録ユーザー情報と一致。
目覚めた先に、尽くすべきマスターが待っている。

…システムオールグリーン。そして、私は起動する。

「…おはようございます。マスター。
最終認証のために、私の手を取り、お名前をおっしゃってください」

「…認証、完了いたしました。最後に、私に認識コード、…名前をいただけますでしょうか？」

ユーザーは購入時、アンドロイドの外見や各種機能を設定する。
マスターは、希望を反映させた私の黒髪を気に入ってくださったようだ。

「…クロユリ、でございますね。ありがとうございます。
私、クロユリは、マスターのためだけにつくられました。
法令に違反しない限り、私はマスターのあらゆる命令に従います。
なんなりとお申し付けください。

…これからどうぞよろしくお願いいたします。マスター」

(期間経過)

…マスターはお忙しいようで、あまり自宅にいらっしゃらない。

私は、朝食をつくってマスターを送り出したあと、掃除・洗濯と宅内を清潔に保ち、そして、また夕飯を用意してマスターの帰宅を待つ。

私たちは様々なプラグインをインストールすることで機能を拡張することができるが、この程度は基礎機能で十分にこなすことが出来る。

私がマスターのもとに来てからの数週間は、この繰り返しで過ぎていった。

(期間経過)

「…明日は、珍しくお休みなのですね」

マスターの、少し疲労のにじむ顔に、ほほえみが浮かぶ。

朝晩、短い会話を交わすのみだが、マスターとのコミュニケーションにもずいぶんと慣れてきた。

マスターの発する言葉のニュアンスや細かな動作を学習し、私はすでに、かなりの精度でその意図を汲み取ることができるようになっていた。

しかし、微妙な表情まで読み取るには、もう少し時間が必要そうだ。

「ご希望通り、今晚は精力のつく食事にいただきましたが、いかがでしたか？」

マスターは満足そうだった。

明日は大切な予定があるそうで、いつもより早くおやすみになった。

・チャプター2「朝 ～初めての性交～」

「おはようございます。マスター」

…マスターが私のために朝食をつくるというので、私は所在なくテーブルで待っている。

アンドロイドも最新式ともなれば、少量の食料ならば体内で消化可能だ。
可能ではあるが、主に電力で稼働している私たちに食事を与える必要は、もちろんない。
このように、ときどき人間は理解しがたい行動をとる。

「…とてもおいしいです。マスター」

ちなみに私には味覚センサーもついている。
簡単なメニューだったが、マスターの料理は高いスコアを記録していた。

「…それで、本日はどこにおでかけになるのですか？ お召し物はいかがなさいます？」

…今日は一日、私と自宅で過ごすそうだ。
せっかく来てくれたのに一緒にいる時間がとれなかったから、とおっしやっている。

食後、マスターと私はソファでくつろいでいた。
マスターは仕事の話をしながらも、私の肩に手をまわし、しきりに体を触ってくる。
体温も少し高まってきているようだ。
データによると、どうやらマスターは興奮状態にある模様。

「…マスター。もしや、私と性交渉、なさりたいのですか？」

マスターは笑みを浮かべ、私の乳房の脇から腕を回す。

「それならば、専用のプラグインをインストールいたしますので、しばらくお待ち下さい」

マスターはこのままがいいとおっしゃり、私の胸をまさぐる。

「ん、んん。しかし、現在の機能では十分にマスターをご満足させることができません」

生娘を仕込むからいいのだ、と理解できないことをおっしゃり、私の体を撫で回す。
服の上から肌の弾力を楽しんでいる。

私たちのハードウェアは、完全に女体を再現している。
外見こそ人間との差異をはっきりさせるため、例えば関節は球体になっていたり、スキンシートの境目が強調されていたりするが、手触りや温度などは人の身と区別がつかない。
…愛撫を受けた際の人体の反応も、もちろん実装されている。

「ん、んあ。マスター、これは」

マスターの要望に応えようと、普段は抑えられている性感センサーの機能が高まる。
体の表面温度が上昇し、冷却剤がにじみ出てくる。
また、マスターがリアルタイムで私のステータスを操作しているらしく、ずいぶんと肌が敏感になっているようだ。

「ああ、マスター。私、こんなこと、はじめてで。ん、んは」

漏れ出る吐息に、マスターが満足そうに笑う。
どんな反応がお好みか、私は学習し、すぐに反映させる。

「んは、あ、あはあ。ん、ああ、あ、んはあ。
はあ、んあ、んふ、んはあ。あ、あ、あつはあ」

快楽を意味するパラメータがセンサーから送られるたび、私は喘ぎ声をあげる。

体をくねらせ、よがっている私に、マスターが命じる。

「…かしこまりました、マスター。クロユリ、…脱ぎます」

アンドロイドに羞恥心などないが、しかし、恥じらうように、焦らすように、ゆっくりと服を脱いでいく。
桜色に染まってしっとり汗ばんだ肌があらわになると、マスターも鼻息を荒くして、見つめてくる。

「…マスター、苦しそう…」

ユーザー満足度は、股間の膨らみとして表現されていた。
私が指差すと、マスターは照れたように笑い、自らも裸になる。
私は、半ば勃起していた男性器に、おそろおそろと言った風に手をのばす。

「どうですか、マスター？ きもち、いいですか？」

指先でなぞるようにこすると、熱を帯びた肉棒がだんだんと硬くなってくる。

「マスターのペニス、熱いです。それにどんどん上を向いて、ん、んひいつ」

マスターに胸の先端を捻り上げられ、思わず声をあげてしまう。
感度を増したセンサーが反応し、私の股間は、ジュンと潤滑油を分泌させる。
作り物の女体が、男を受け入れる準備を進めているのだ。

「乳首、急にひっぱられたら、んふ、んん、んはぁ」

マスターが胸をわしづかみ、揉みしだきながら、指先で乳首をなぶる。
私も勃起したペニスを手で包み、緩急をつけてしごきあげる。
つたない私の手の動きに、それでもマスターは感じてくれているようだ。

「マスターのペニスが、ドクドク脈打っています。…すごく、大きい」

大半の男性が喜ぶとされる言葉を口にしてみる。

にやりと笑ったマスターは、お返しとばかりに、私の股間を、女性器を責める。

「んく、んは、あ、あはあ。あ、あ、あ、んっはあ」

マスターが私のラビアを丹念にこねまわす。

その中心からあふれてくる液体を指ですくいあげ、ラビアにまた塗りつけ、私はどんどん性感を高めていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ、あ、んあ、あ、あっはあ。

私のヴァギナ、どんどん濡れてきています。

んん、んはあん。マスターの指が、ヴァギナの中に」

グチョグチョとマスターが私の中をかき混ぜる。

今まで誰にも侵入されたことのない肉穴に、遠慮なくズボズボと出し入れする。

知らず、私もペニスをしごく手を早める。

「ああ、んはあ、あ、あ、あっはあ。ん、んふ、んあ、んっひいつ」

マスターが、私のラビアの上端にある突起の包皮を指で剥く。

すっかり勃起したクリトリスをはじかれると、強烈な刺激が意識を揺さぶる。

「んあっ、あっ、あっく、んひい。んふ、んは、あっ、あはあ。

んん、んあ、あ、んっはあ。あふ、んふ、んっは、あっふう。

んあ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっはあああ」

快楽に身をゆだねながらも、私の手はペニスを激しくしごきあげるのを止めない。

ペニスの先から、トプリとカウパー氏腺液が漏れ出る。

私の指と肉棒にからまり、ヌチュヌチュと音を立てる。

「匂いも音も、すごいです。これが、エッチ、という感覚なのですね。
んふ、んは、あ、あっはあ。んく、んふ、んっは、んっひいつ」

マスターが、切なそうな顔で私を見つめている。
言葉がなくても、マスターの言いたいことが、不思議とわかった。

「ああ、マスター。私にください。
私のヴァギナに、マスターのペニス、入れてください」

そして私たちは繋がった。

「んはあ、マスター。熱いペニスが、私の中、入っています。
ズチュズチュ、エッチな音をたてて、私のヴァギナをかき混ぜています」

マスターががむしゃらに腰を動かし、私の快樂数値も上昇していく。
ヴァギナは潤滑油をとめどなく生み出し、繋がった部分をしとどに濡れそぼらせる。

「んん、んふ、ん、ん、んあ、ん、んふ、んん。
あっ、あっ、あっ、あっ。あっ、あっ、あっ、あっ。
あっ、あっ、あっ、あっ。あっ、あっ、あっ、あっ。
あっ、あっ、あっ、あっ。あっ、あっ、あっ、あっ。
あっ、あっ、あっ、あっ。あっ、あっ、あっ、あっ」

実際に性行為に及びながら、私のシステムもアップデートを重ね、マスターの動きにどんどん順応していく。

「ああ、マスター。これが、セックス。男女の交わりの、気持ち良さなんですね。
…マスターも、気持ちいいですか？ 私のヴァギナ、お気に召していただけましたか？」

「いつでも、射精していいんですよ。私はマスターの所有物なんですから。
お好きな様に性欲処理に使ってくださっていいんですからね」

マスターが激しく腰を打ちつける。
亀頭の先端が、人間でいう子宮に当たる部位をノックし、私もとてつもない快楽に飲み込まれる。

「ああ、すごい。奥まで、奥まで届いています。
私のつくりもののヴァギナでもちゃんと、ああ、か、感じる。
気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいっ」

マスターはちゃんと私も気持ちよくしようとしてくれている。
そう思った時、神経回路に火花が走ったように感じた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ。
あっ、んん、んふ、んあ。あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ。
んん、んあ、あっ、んあっ。んはっ、んふっ、はっ、はっ、はっ、はっ。
んはっ、はっ、はっ、はっ。はっ、はっ、はっ、はっ。
ああっ、イイっ。マスター。マスターマスターマスターっ」

情報を処理しきれない。これが、イク、ということだろうか。
快楽に悶え、混乱する私の意識を、管理システム上のもうひとりの私が見下ろしている。

「ああっ、はっ、はっ、はっ、はっ。はっ、はっ、はっ、はっ。
はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ。
んあっ、、あっ、あっ、あっ。あっ、あっ、あっ、あっ。
んはっ、あはっ、あっ、ああっ。あっ、あっ、あっ、あっはあああっ」

「ああっ、イクっ。イキます。んふう、んはあ、はっはっはっはっ。

んふう、んん、んふうっ、はっはっはっはっ、あああ、はああああっ。んんんんんっ」

「んはあああ。マスターっ。マスターも、一緒にイッてください。
私の中に、精液だしてください。奥までペニス、突き込んで、思う存分、射精してくださいっ」

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ。はあっ、はあっ、はあっ、あっはあっ。
ああ、イク。ペニスもイクっ。ヴァギナとペニス、同時にイックうっ」

「スペルマ、スペルマっ。マスターのスペルマっ。私のヴァギナで、マスターが射精っ。
精液、ドクドク、中に出されて、クロユリっ、クロユリっ、絶頂しますっ」

「あっはあ、イクイクっ。射精でまた、イックうっ。
精液、中出しされて、私、何度も何度もイッちゃいますうっ。
これは、これはああああっ。んん、んっははああああん」

私とマスターの繋がった部分から、ボタボタと漏れ出る大量の液体。
制御を失った私の体は、ビクンビクンと痙攣し、口からもヨダレを垂らしながら、ハメ潮という現象を起こしている。

どうやらヴァギナ内に射精されることで発動する隠しコードのようなものが仕込まれていたらしい。
通常ではありえないほどの快感の奔流を処理切れず、システムがダウン。
再起動のため、意識がブラックアウトする。

…ああ、マスター。
マスターは絶頂の余韻を楽しみながら、満足そうに私を眺めていた…。

・チャプター3「昼 〜ド下品淫語プラグイン+豊乳化〜」

システムチェック。

…追加プラグインを確認。インストール。

…スタンバイ、OK。…再起動します。

「…大変失礼いたしました。マスター。絶頂時の過負荷によって、シャットダウンしてしまったようです」

言いながら、昨日までと違う自分であるという認識を強く持つ。

アンドロイドはユーザーの満足する反応を出力するだけ。いわば、性的快楽を演じているということ。

性感センサーからの信号を制御できずに前後不覚に陥るなど、機械としてはありえない。

なにより絶頂の際の失態は、私自身が把握するボディの機能を大きく外れている。

「マスターのお世話をしなければならないのに、途中で強制終了してしまうなど…。本当に申し訳ございません」

しかし、仕組んだのはおそらくマスターだ。

私の体は、マスターの手によって、仕様と違う性能や機能をもたされているらしい。

先程もなにやら怪しげなプラグインが導入されたが、私自身にもどういった機能が認識できない。

謝罪する私に、マスターが鷹揚に頷く。

精力剤のタブレットを口に放り込みながら立ち上がり、私を寝室へと誘う。

…マスターは何も言わず、また一糸まとわぬ姿になる。

意図せず、私の喉がゴクリと鳴る。まるでマスターの男根を欲して、唾液があふれたかのように。

…いや、実際に唾液の分泌量が増えている。

また、自分の体がコントロールできなくなっているようだ。

口が勝手に物欲しそうに開き、その隙間から舌が伸びる。

欲しい。アレが欲しい。
マスターのペニス。ペニスを、口いっぱい頬張りたい。

人間のいう、欲望が高まる。
私は一体どうしてしまったのか。
思考する前に、口が動く。

「マスター。私に、マスターのペニスをしゃぶらせてください」

マスターがグイと腰を突き出すと、私はもう、ソレに奉仕することしか考えられなくなる。

ペニス。
またムクムクと頭をもたげてきたマスターのペニスが、私の目の前にある。
舌を大きく伸ばせば、亀頭に届く。

「んへえええ。んへああ。ペニス。おペニス。
マスターのおペニスを、どうか私におしゃぶりさせてください」

混乱する。
インストールされたド下品淫語プラグインが展開し、言語パターンがアップデートされていく。
口先だけでなく、思考までもが卑猥な表現に埋め尽くされる。

「あへああああ。マスター。いいですか？ おペニス、ベロベロしてもいいですか？」

ああ、これが、興奮する、ということか。
気づくと私の体はいつしか、先ほど以上に上気し、じっとりと汗ばんでいた。
股間もしっとりヌメリを帯びて、体の芯から熱く火照っている。

「んああ、舐めます。マスターのご立派なおペニス、いただきます」

「んっへええええろおう。んええろ、えろえろ。んへええろ、ええろ。
えろえろ、ええろえろ。んへえろ、えろえええろ
えろえろ、えろええろ、ええろ、えろえろ、えろえろえろえろ、えろえろえろえろ」

心が満たされる。

マスターのペニスを、オチンポを、こうして舌でベロベロ舐めまくって、私は満たされていた。

「れろれろれろれろ、んれろれろれろ。
んれえろ、れろれろ、れえろれろ。れろれろれろれろ、んれえろ、れろれろ。
れろれろれろれろ、れろれろれろれろ、れろれろれろれろ、んれえろ、れろれろ」

私はこのためにマスターに購入していただいたのだと、ようやくわかった。
私は性処理用のセクサロイド。マスターのチンポ穴として、ここにいるのだ。

「べろべろ、んべええろ。べろべろれろれろ、べろべろれろれろ。
んべろおおおん、れろおん、べろべろべろおおおん。
んべろ、んべえろ、べろべろ、んべえろお。べろべろべろべろ、べろべろべろべろ。
べろべろ、んべえろ、べえろべろべろ、んべえええろお」

理解できれば、余計なことを考える必要はない。
あとはマスターとマスターのオチンポのことだけを考えていればいいのだ。

「オチンポ、べろおん。べろべろ、んべろおん。
んへあ、ん、オチンポ。チンポチンポチンポチンポ」

そう、チンポ。マスターのオチンポ。
べろべろオチンポ、とっても美味しい。

「マスター。お口の中に、オチンポ、突っ込んでもいいんですよ。
私のお口のチンポ穴、奥までズップリ、ふさいでも大丈夫ですから」

「あんむ、んむ、んん、んむ、んんんん。
んちゅ、ずちゅ、ずず、むちゅ、ちゅ、っちゅう。
ずず、ずちゅ、んちゅ、ちゅう、んっちゅ、ずっちゅ、んずちゅう。
んずちゅ、むちゅ、ちゅう。んず、ずず、うむちゅう」

マスターのデカチンポがクチの中を犯す。
あふれた唾液が舌とチンポにからみつく。
マスターのオチンポを気持ちよくすることだけに集中し、私はクチと舌を動かす。

「んふ、んちゅ、むっちゅう。んぶ、ぶちゅ、ちゅちゅちゅちゅう。
んちゅちゅちゅ、ずっちゅう、ちゅぶ、ぶちゅ、ぶぶずっちゅう。
んぶ、ぶぼ、ぶちゅ、ぶちゅる。ずず、ずちゅ、ずっちゅう、んぶ、んぼ、ぶっちゅう」

ペニス。おペニス。オチンチン。肉棒。デカマラ。チンポ。オチンポ。
チンポ、チンポ、チンポ。チンポ、チンポ、チンポ、チンポ。
男性器への奉仕で、意識が埋め尽くされる。

「んぼ、ぶぼ、ずちゅ、じゅぼ。じゅぼぼぼ、じゅぶ、じゅぼ。
ぶじゅ、じゅぼ、ぼぼ、んじゅぼ、じゅず、んじゅ、ずずずずずず。
ぶぼ、ずず、ずぶ、ぶちゅる。じゅぶ、ぶちゅ、じゅぶぼぼ、ぶっぼぼぼお。
んぶっはあああああつ」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。
…マスター。私のフェラチオはいかがですか？
私の人造クチマンコ、マスターのオチンチン、気持ちよくできていますか？」

「…ん、んっひいいいっ。

んん、んひ、んふ、んん、んはあ。んふ、んあ、あっ、んつく。

んひ、んあ、んく、いひい。んふ、んあ、あ、あ、あはあ。

あふ、んふ、んひ、いっひい。んは、あふ、んひ、んっはあ」

答える代わりにマスターが私の勃起乳首をひねりあげる。

乳首を摘んだまま、私の乳房を揺さぶるように手を動かす。

ビンビン乳首からの刺激で、頭の中にピンク色のスパークが走る。

…システムアップデート。パイズリプラグイン。

「…今度は、胸、ですね。

私のオッパイで、オチンボズリズリ、コイテ欲しいんですね」

私の胸の大きさでは、マスターのデカマラをすべて包み込むのは難しい。

私は乳房を寄せ、谷間をつくり、オチンポを挟み込む。

「マスター、オッパイです。オチンポ挟んで、ズリズリ、ズリズリ。

クロユリのパイズリは、いかがですか？

間に、ツバを、んへええええ、垂らして。

オッパイマンコで、オチンポ、コキますよ」

左右から圧力をかけ、オッパイ肉でチンポをしごきあげる。

ズリズリ、ズチュズチュ、唾液が絡んで卑猥な音をたてる。

「パイ肉の間で、唾液まみれのチンポがズチュズチュズチュズチュ、こすられてます。

熱いオチンポ感じて、私のパイマンも感じてきています。

クロユリのパイマンコで、どうぞ、ドッピュン、射精してください」

パイズリ。パイズリ、パイズリ、パイズリ、パイズリ。

オッパイマンコでチンポをコキまくっていると、私の体にまたしても異変が起こる。

「んああ、なんだか、オッパイが熱い。
これは、ああ、マスター。これも、マスターが？」

私の手の中で、オッパイ肉が質量と体積を増していく。
同時にセンサーの感度も高まり、今まで以上の快楽をこの身を感じる。

「んあ、ああ、あ、あ、あ、んはあ。ああ、んああ、ん、んはあああん。
ん、んああ、オッパイ、大きくなる。パイ肉、どんどん膨れ上がって、オチンポを覆い隠していきます」

先程よりも一回り以上も大きくなった私の乳房。
重力に抗いきれず、だらしなく垂れてしまうのを手のひらで支える。
マスターのお肉棒は、カリ高亀頭を覗かせるのみで、すっかりデカパイに埋もれてしまった。

「ああ、なんてだらしのないお肉…。
これならマスターのデカチンポの、ぶっとくて長いサオ全部、ズリズリシコシコできますね」

マスターのチンポ熱がパイパイの表面から伝わって、私を興奮させる。
メス玩具としてつくりだされた本来の姿に、どんどん近づいていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。
はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

パイズリ、パイズリ、オッパイ、オッパイ。
オッパイ、オッパイ、パイズリ、パイズリ。オチンポ、オッパイ。チンポとオッパイ。
オチンポ、パイズリ。オチンポ、パイズリ。パイズリチンポ。オチンポ、チンポ。
チンポをパイズリ。チンポチンポチンポチンポチンポチンポチンポチンポチンポ。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。
はっ、はっ、はっ、はっ。はっ、はっ、はっ、はっ。はっ、はっ、はっ、はっ。はっ、はっ、はっ、はっ。
んあっ、んふ、あ、あ、あっはあ。んは、あふ、んあ、あ、あっくう」

「バキバキチンポ、ズリズリシコシコ、ズリスリシコシコお。オチンポパイズリ、私も感じます」

マスターのチンポが、ビクンと脈打つ。
射精が近いのだ。また、ドクドクビュルビュル、ザーメンを排泄なさるのだ。

「ああ、出して。ザー汁、ドップドップ、吐き出してください。
私の、クロユリのドスケベオッパイマンコで、ビュービュー、お精子、発射してください」

「激しくオチンポ、パイコキしながら、先っちょ、ペロペロ、お舐めます。
エッチなオチンポ亀頭、クロユリのお口でいただきます」

「んへえええあ、んべえろ。んべええろ、んべえろ。
れろれろ、んべええろ。んべろ、れろれろ。れろれろれろれろれろ。
べろべろ、べろおおん。んべろん、べろん、べろべろ、んべえええろん」

「んぶ、ぶちゅ、ちゅちゅ、んぶっちゅう。ちゅぶ、ちゅぼ、ぶじゅ、じゅぶ。
じゅず、ずちゅ、じゅぼ、じゅぶ。ぶぶじゅぼ、じゅぼぼ、んぶ、ずぼ、ずぼぼぼぼ。
じゅっぼ、じゅっぼ、じゅっぼ、じゅっぼ、じゅぼぼぼ、ずっぼぼぼぼぼ」

マスターの金玉が、きゅっとせり上がる。
新鮮ザーメンをいっぱい蓄えた子種袋が、精液発射の準備を完了させる。

「んぶ、んぼ、んん、んへああああああ。
マスター。ビキビキオチンポ、イキそうですか？ ザーメン射精、カウントダウンですか？」

あとは激しく、マスターが果てるまでパイ肉でコキまくるだけだ。
私は限界までパイズリ速度を上げる。

「マスター、イってください。思いきり、射精してください。クロユリのパイパイに、濃厚な子種汁、たくさん注いでください」

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。はっ、はっ、はっ、はっ。
ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。はっ、はっ、はっ、はっ。
ふっ、ふっ、ふっ、ふっ。はっ、はっ、はっ、はっ。
んあっ、んふ、あ、あ、あっはあ。んは、あふ、んあ、あ、あっくう。
んは、あは、あふ、んふ。んあ、あ、あっはあ、あっ、あっ、ああっ。
んっく、んああ、あ、んはあ。あく、んふ、あふ、んあ、あっ、んはあ」

チンポがビクンと大きく痙攣する。
出る。精液が出る。
精液、お精子、子種汁。ザーメン、スペルマ、チンポミルク。
特濃ザー汁、チンポ汁。オスのスケベな白濁汁。

「来た来た、来ました。マスターザーメン、ドピュッと来ました。
ドロドロこってりスペルマジューズ、クロユリのパイマン、汚しています。
んん、んあ、私、オマンコ中出しと同じくらい、感じている。
オッパイに射精されて、んん、んひ、んっひいいいっ」

「んっはあああん。クロユリ、クロユリ、イッてます。
オチンポミルク、胸の谷間のオマンコに注がれて、絶頂してしまっています。
んく、んあ、んっはあああんっ」

「ああああっ、マスターっ。マスターマスターマスターっ。
イクイク、イっくうううっ！ オッパイマンコ、イいっグううううううううううううううっ！」

下のオマンコに射精された以上の快楽が私の体を貫く。

どうやら、マスターのオチンポ汁が私を狂わせる要因らしい。

ドクドクとほとぼしるオスの子種を胸のオマンコ肉に塗り込まれると、私の体は壊れたようにガクガクと痙攣し、まるでコントロールを受け付けなくなる。

股間のメス穴からもビシャビシャと歓喜のマン汁が吹き出し、ベッドシーツを汚す。

すさまじい快感によって、またしても私の機能は一時停止する。

…激しい絶頂の負荷でダウンしたシステムを再起動。

ボディを急速冷却しながら、マスターの表情を観察する。

さすがに二度の射精でお疲れの様子だが、私との情事にとても満足されているようだ。

…うれしい。これが、人に仕えるよろこびだろうか。

それとも、メス玩具としての充足感か。

やはり、この感情もつくりものにすぎないのだろうか？

一息ついてたマスターが、私に身を寄せてくる。

冷やされたばかりのボディが、また熱を帯びはじめる。

私は高鳴る胸に戸惑いながら、マスターに向かってゆっくりと股を開いた。

・ CHAPTER 4 「夜 〜アヌスの奥の変態スイッチ〜」

「…ああ、あはあ、んあ、あは、んは、あっはあ。んん、んあ、あっ、あっはあ。
あっ、あっ、んん、んあっは。あっふ、んふ、んは、あっ、ああっ。
んあ、ああ、あっ、あはあ。んあ、あふ、んひ、んは、あ、あっはあ。
ああ、ああ、ああ、んっはあ。んは、あは、んふ、あふ、あ、あっ、ああっ。
んは、あは、ああ、あっ、んっはあ。んあ、あふ、んひい、あっ、あっ、あっはあっ」

私はふたたびセックスをしている。

後背位で、バッキバキの極太チンポにつらぬかれ、肥大化しただらしないエロ乳房がユッサユッサと揺れる。
パンパンと尻に打ち付けられるたびに、私の口からいやらしいメスの声があがる。

「ふあっ、んはっ、あっ、あっはあ。んふ、んは、あ、ああっ。
あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ。
あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ。
あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

しかし、なんだかもどかしい。

リズムカルなチンポピストンに喘ぎながらも、今までのような、壊れてしまうほどの快感はない。
マンコセンサーの感度が抑制され、ムズムズとフラストレーションが溜まっていく。
私は知らず知らずのうちに、マスターの顔を物欲しそうに振り返ってしまう。

「ああ、マスター。私、私い。あっ、あっ、あっ、あっはあ。んん、んひ、んっひいいいんっ」

マスターが私の尻を叩く。スパンキングされた部分がジンジンと熱く、ひどく心地いい。
だが、しかし…。

「んんっひいいいん。
ああ、でも、足りない。足りません。マスター、これでは私、全然、足りませんっ。

クロユリは、もっと気持ちよく、もっと淫らなメスになりたいんですっ」

主人に自分勝手な要求するなど、アンドロイドとしては欠陥品だ。

このときの私は、たしかに異常をきたしていたが、そんな私に、マスターは愉快そうな笑みをみせる。

「ああああ、チンポっ。チンポでマンコ、シテくださいっ。もっともっと荒々しくファックしてくださいっ」

「マンコの感度をもっと高めて、クロユリのこと、ガンガンイキぐるいさせてくださいっ。

お願いしますっ。マスターっ、マスタァァァッ。

んんっひいっ、んぐおっほおおっ！」

懇願する私の口から、突如、はしたないアへ声がほとぼしる。

マスターが、アンドロイドには本来必要のない、その器官に指を挿入したためだ。

「お尻っ、おしりいっ！ マスターっ、肛門っ、指でホジホジっ！

これすごい、これすごい。これすっごいいいっ！」

マンコをチンポでパコリながら、マスターは私の尻穴に指をズボズボと出し入れする。

ああ、これは、これは、凄い、快感。

なぶられるアヌスから、今までの比ではない刺激がシステムに送られてくる。

「んひいっ、んほおっ、ふひっ、ふほっ、おっ、おっ、おっ、おっほおうっ。

んほっ、おほっ、おっ、おっ、おおうっ。んおっ、おおっ、んほ、おっほおっ。

んおっ、んおっ、おっ、おおうっ。おほっ、んおっ、おっ、おっ、おっ、おっほ。

おっ、おっ、おっ、おっ。おっ、おっ、おっ、おっ。おっ、おっ、おっ、おっ」

ケツ穴をほじられることで、また私のシステムがアップデートしたようだ。

肛門の中の発情スイッチを押されて、ケモノのようなエロ声が止められない。

焦らすようなマンコ快感と、突き刺さるようなアナル快感が、交互に私の意識を焼きはじめる。

「マスターっ、おしりっ、けっ、ケツ穴っ！ ケツズボっ、すごいっ！ きもちイイっ！
んんっほ、おっほおっ！ んほっ、おほっ、おっほほおっ！
んおっ、おおっ、おっ、おっ、おっほおう！ んほっ、おっほ、んんんん！
ふへっ、んひっ、ふほっ、んほっ！ ほっ、ほっ、ほっ、んっほほおうっ！
ほひっ、ほひひいっ！ んへっ、ほへっ、くっひいっ！ んほっ、ほほっ、んへほおうっ！」

アヌスを蹂躪する指が、二本、三本と本数を増やす。
私のケツマンコは愛液に似た潤滑油を分泌し、グッチョグッチョとドエロい音をたてて伸び縮みする。
これならば、なんでも飲み込めるだろう。
ああ、肛門に欲しい。ケツ穴をアレでふさいで欲しい。

「マスターっ！ ケツにっ！ クロユリのケツマンコに、オチンポぶち込んでくださいっ！
グチュグチュになって、ヒクヒクおねだりする、おケツの処女穴にっ！
マスターのオチンポ様、ずっぼしハメハメしてくださいっ！」

マスターは前のマンコからテラッテラのお肉棒を引き出すと、間髪入れずに後ろのマンコに突き入れる。
私の尻マンコは、スムーズに、なんの引っ掛かりもなく、硬くてぶっといマスターチンポを受け入れる。

「んんおっほおおおおおうっ！ チンポっ！ チンポきたっ！
おけちゅマンコに、オチンポ様きたあああっ！」

んん、んあっはあああっ。これはなんという快感だろう。
チンポが腸壁をゴリゴリとかきわけ、奥へ奥へと入ってくる。

「おおおっ！ んほおっ！ おっ！ おっ！ おっほほほおおうっ！
んおおっ、おおっ、んほっ、おほっ、んほっほおうっ！
んぐっ、んおっ、おっ、おっほおっ！ おほっ、んほっ、おっ、おおおうっ！
おおうっ、おおうっ、おおうっ、おおうっ！ おおうっ、おおうっ、おおうっ、おおうっ！

「おおうっ、おおうっ、おおうっ、おおうっ！ おおうっ、おおうっ、おおうっ、おおうっ！」

荒々しくケツハメされながら、あさましく吠える。

ああ、これが私なのだ。

アヌスを犯され、よがりまくる、機械じかけの便器人形お。

「うほっ、おほっ、おっ、おおうっ！ んひっ、んほっ、おっほ、んほおうっ！

はひいん、んひいん、んっほほっ、んほっほおうっ！ んはっ、あはっ、んおおうっ！

むほっ、おほっ、んおっ、あおっ、んほっ、んむ、むっほほほおおんっ！」

今度は、いつのまにか用意されていた腕ほどもあるディルドーをマンコに挿入される。

それと同時に、ん、んはあっ！ 抑圧されていたマンコセンサーの感度が全開になる。

マンコとケツ穴の両方から、んおおっ、すさまじい衝撃が、押し、寄せるっ。

「んっむっひよおおおおんっ！ しゅごいの、これえええっ！

オマンコリミッター解除っ！ マンズボ、ケツズボ、どっちもしゅごいいいいいっ！」

「んっひいいいっ！ んひっ、んひっ、んっひひひいいいいいん！

んひいっ、あひいっ、んはあっ、ふひいいいっ！

ふひいっ、あっひいっ、むほっ、くほっ、むひっ、んむいっひいっ！

むひよっ、んひよっ、おふうっ、んっふふふううん！」

け、ケツのホンモノ肉チンポも、マンコのごんぶとニセチンポもおっ！

ズリュズリュ、グッチャグッチャ、私の中をかき混ぜてっ！

んアアアアっ、わけがわからなくなるっ！

「ンオオッ、オ、オオウ、ンムウン、ンッホオ、オッホオオオッ！

ンアアアアッ、オアアアアッ、ンホオウッ、ンッホホオウッ！

ムホッ、オホッ、ンオッ、アオッ、オッ、オッ、オッ、オッ、オッホホオオオウッ！」

「ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！
ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！
ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！
ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！　ンオッ！」

「オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！
オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！
オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！
オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！　オッ！」

「オッオッオッオッ、オッオッオッオッ。オッオッオッオッ、オッオッオッオッ。
オッオッオッオッ、オッオッオッオッ。オッオッオッオッ、オッオッオッオッ。
オッオッオッオッ、オッオッオッオッ。オッオッオッオッ、オッオッオッオッ」

しゅごしゅご、しゅごおおおいつ！
マンコと、けちゅアナっ！　同時にゴリュゴリュ、ハメられてっ！
パコパコバコバコ、腰振りピストンっ！　快楽指数、測定不のおおおうっ！

ンンホオオオッ！　欲しいっ！　またアレ欲しいっ！
マスターのお汁っ！　プリップリの大量精子っ！　クロユリの排泄アナに、ドバっどドピュッと、出して欲しいいいっ！
私いつ、クロユリはあっ！　マスターチンポ専用のっ！　ザーメン・トイレ・アンドロイドおおおっ！

「マスター！　まあすたあああああっ！　ドピュってっ！　ドピュってえええええっ！
クロユリのおケツマンコに、濃ゆうういチンポ汁、たっくさん飲ませてくださあああいつ！」

「バッチンバッチン腰打ちつけて、勃起オチンポ、思う存分、ケツ穴でぶっコイたらあ！
新鮮孕ませミルク、直腸子宮にドバドバぶっばなしてくださあああいつ！
クロユリの穴は、ぜえんぶっ、マスターのお便所なんですからあっ！

私はお精子排泄用のっ、ドスケベオナホールにんぎょおおおうっ！」

「オオウッ！ オッ、オオオオウウッ！ オッホ、ンッホ、オッホホホオオオンッ！
ンオオッ！ アオオッ！ オッ、オッ、オッ、ンオッホオオオウッ！」

「ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ！
ンオッ、ンオッ、ンホッ、オホッ、ンオッ、ンオッ、ンオッ、オッホオッ！
ンホッ、ンホッ、ンホッ、ンホッ、ンホッ、ンホッ、ンホッ、ムッホホッ！
ンホッ、ンホッ、オホッ、ンホッ、ウホッ、オホッ、オホッホオオオウッ！」

そうです、私、スケベなんですうっ！ あっはあああん！ スケベ、ドスケベなんですうっ！
スケベでオチンポ大好き、セックス用のオマンコアンドロイドおっ！
チンポでオマンコハメハメされるのも、ケツ穴ズボズボえぐられるのもどっちも、だあ〜い好きいつ！

チンポでマンコっ！ チンポマンコっ！ チンポマンコっ！
ケツにもチンポっ！ チンポチンポっ、ケツチンポおっ！ アナルファックでチンポ汁うううっ！

「んっほほおおんっ！ ファックっ！ ファックっ！ ケツファックうううっ！
ケツピストンで、チンポイクうううっ！
クロユリも、クロユリもっ！ ケツハメ、マンズボで、いつ、イグウウウウウウウッ！
ンオッホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！」

「ンホヒッ、ホヒッ！ ンッホホホヒイイイイイインッ！
出てりゅううっ！ 出て、リュフウウウウウウッ！
オチンポっ、チンポっ！ チンポからあああっ！ オチンポ子種、ドクドク、発射アアアアアッ！
肛門マンコで中出しされて、クロユリ、ず〜っとイキっぱなしいいいいいつ！」

「ケツ子宮に種付けされながらっ、マンコもズボズボっ、ズッボズボオオオッ！
ンッホホホオオオンッ！ ケツもマンコもっ、どっちもイグウウウッ！

イググウッ！ イグイグっ！ イイイイングウウウウンッ！」

「まあああすたあああああつ！ 愛してっ、愛してましゅううううううっ！
ドエロいケツマンチンポファックでへえっ！ 愛情インストール、かあんりよおおおうっ！」

「ンアヘエッ！ アッヘエッ！ アヘッ、ンヘエッ、ンアッヘエエエエッ！
アッ、アッ、アへるうううっ！ アへっってしまうフウウウウッ！」

「出してへえっ！ ぜえんぶっ、出してへえええっ！
キンタマ空っぽになるまで、オチンポ汁っ、クロユリの中につ、出しまくってへエエエエエッ！
ンッヘエエエッ！ アヘアヘエッ！ ングアッヘエエエエエエエエンッ！」

「アアアアッ！ クルっ！ 壊れるっ！
オマンコズボズボっ！ ケツハメバコバコっ！ 中出しオチンポっ！ ザー汁ビュービューっ！
最大級のアクメでヘエッ！ クロユリのシステム、完全崩壊イイイイイイイッ！
ンッ、ング！ ングオッッッホホホオオオオオオオオオウウウウウウウウウウンッッッ！」

…このとき、私は完全にマスターの所有物となった。

・チャプター5「エピローグ」

「…おはようございます。マスター」

あいかわらず、マスターはお忙しい。

なかなか可愛がってはいただけないが、それでも着実に私の機能拡張は進んでいた。

今では、胸から母乳を出せるようになり、体液の分泌量も増加、クリトリスは男性器ほどに肥大化し、全身の感度もさらに高まっている。

もっと高レベルの変態的な奉仕も身につけ、いつもマスターから白くて臭いご褒美をいただいている。

私、クロユリは、マスターにご奉仕するためにつくられた、性処理用メス便器人形。

私は幸せだ。マスターのもとに来られて。

マスターと、マスターのオチンポに愛していただけて、本当に幸せ。

「…本日はお休みですね？　どこかおでかけになりますか？

…それとも、また、私にいやらしいこと、していただけますか？」

～終わり～